

HORIMARU CRAZY CAR

ほぼ例外なくわたしたちは“搾取”されている。それは“生きづらさ”の根っこにあって、目に見えない、臭いもしないし、やられているという自覚も全くない！という。それを解こうというのだ。あなたもHORIMARUセミナーに参加してみませんか。後年後悔するよりも“転ばぬ先の杖”と……。

国語大辞典 さくしゅ【搾取】
階級社会で、生産手段の所有者が直接生産者とその生活維持に必要な労働時間以上に働かせ、その労働生産物や成果を取得すること。転じて、乏しいものを無理にとること。(C) 小学館

2017.07.31 VOL.07

日時 7月31日(日)午後1時30分～
HORIMARUセミナー VOL.7のテーマ
なぜ“生きづらい”のか、その真相を解く

あなたも“搾取”されている

会場 京都学習会館第1会議室(堀川丸太町)

お話をする人は、京都中央労働学校講師の木原隆志先生です。
参加費は、500円です。

申し込み先: 京都中央労働学校・運営委員会(電話: 841-8141)

HORIMARUセミナー 募集要項

申し込みの手続きは「申込用紙」に必要事項を記入し申し込んでください。

募集の定員は50名です。

時間は、午後1時30分～4時00分

参加費は、500円 金額に消費税が含まれています。

会場は『京都学習会館』

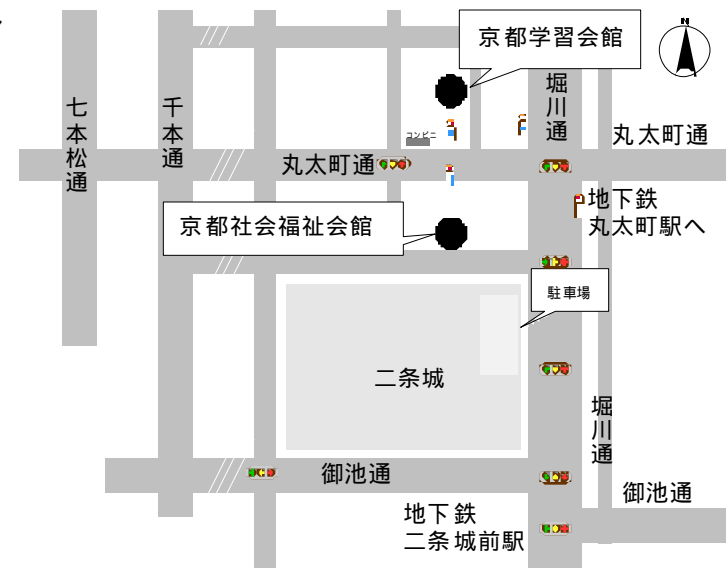
上京区堀川丸太町西一筋目上ル

電話(075)841-8141

FAX(075)821-3665

二・四輪共に駐車場はありません。二条城市営駐車場へお願いします。

地下鉄丸太町駅・二条城前駅から『京都学習会館』まで歩いて10分以内です。



キリトリ

HORIMARUセミナー 参加申込用紙

ふりがな	性別	年齢
氏名:	男・女	才
現住所		
職場・学園		
連絡先:		
備考:		

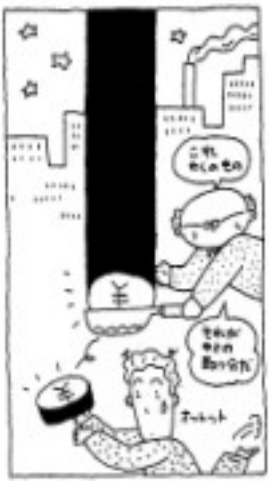
……以下の文章を読んで考えてください。21世紀の日本でも生きていくことなんです。

マルクスは「搾取」の秘密を解きあかした

見えなくなった搾取の仕組み

「はたらけど
はたらけど猶わが生活
楽にならざり
じつと手をみる」

これは、歌人石川啄木が、明治の末年、自分の貧しい生活の思いを詠んだものですが、長く続く不景気に言論の自由への暗い弾圧が重なって、「時代閉塞」のゆきづまり感が広がっていた当時の日本で、多くの人びとの



では、マルクスは、どんな時代にこの問題にとりくんだのか、そのことから話を始めましょう。
マルクスが『資本論』を世に問うたのは、一八六七年、十九世紀のな

市場経済の法則をつきとめました。しかし、その法則がわかってても、労働者と資本家の取引がなぜ資本家だけを富ませるのは、解明できませんでした。
一方、社会的不合理の改革となえる社会運動家たちのところでも、事情は同じような調子でした。彼らは、資本家の富の不当さをつき、「資本家は労働を盗みとっている」といった告発をしました。労働者の取引のどこに労働者の生活苦の根源があるのかをつきとめることはできませんでした。これでは、労働者の困難を解決する社会改革を願っても、その答えは出てこないのです。

マルクスは「剰余価値」の仕組みを発見した

そういうなかで、資本主義的搾取の秘密を明快に解きあかしたのが、マルクスでした。マルクスが解明した内容を短い文章で説明するのはむずかしいのですが、理論だての様子だけでも見ていただければと思つて、あらましの紹介を試みてみましょう。

共感を呼んだことでした。

いま、日本でも世界でも、おそらく啄木がこの歌を詠んだとき以上の深刻さで、貧困と格差が大問題になっています。二〇〇八年は、「ワーキング・プア」の言葉とともに、人間らしい生活からしめだされた「難民」現象が、社会のあらゆる分野に広がりました。年末以後は、各産業で「派遣切り」や「雇止め」がこれでもかこれでもかと続いています。

高度な経済を基盤にした文明社会であるはずの現代社会で、なぜ貧困と格差が広がるのか。どこにその原因があるのか。社会のどこを変えたら、そういう不合理をなくせるのか。百四十年前に、この大問題に明確な解答をあたえたのが、マルクスです。

では、マルクスは、どんな時代にこの問題にとりくんだのか、そのことから話を始めましょう。

マルクスが『資本論』を世に問うたのは、一八六七年、十九世紀のな

イ。マルクスがまず明らかにしたことは、労働者が資本家に売っていたのは、それまで思いこまれていたように、「労働」ではなく、労働をする能力、すなわち「労働力」だということでした。

口。「労働力」商品の価値はほかの商品と同じように、その商品の再生産の費用で決まります。再生産の費用とは、労働者が引き続き働ける状態を維持する費用ということになりますから、労働者とその家族の生活費ということになります。

ハ。資本家は、買入れた「労働力」を消費する、つまり自分の工場で働かせます。「労働力」商品はこれを働かせることで新しい価値を生み出すという、ほかの商品にはない特性をもっています。だから、ある時間働かせれば、賃金分の価値を生みだしますが、そこで仕事をやめさせる資本家はしません。

必ず、賃金分に相当する時間をこえて、労働を続けさせます。その時間帯に生みだされた価値は、まるまる資本家のものになります。これが、「剰余価値」

かごろのことです。

当時、資本主義はすでにイギリスで社会の支配的な体制となりフランス、ドイツなどヨーロッパの大陸諸国にも広がって、経済の新しい発展の時代を開いていました。ところが資本主義の発展とともに、そこでの生意の担い手である労働者の状態の悪化が、社会の大問題になってきたのです。

もともと生産にたずさわる庶民の貧困という問題は、昔からどこにもありました。十八世紀の末、フランス革命に民衆が立ち上がったのも、封建社会での貴族・地主の搾取のひどさに大きな原因がありました。ただ、そのころには、搾取の姿が目に見えてわかりました。生産した農産物の大きな部分が、領主や政府に強制的にとり上げられるのですから（日本で江戸時代に領主や幕府が、農民から「年貢」を取り立てたのも同じやり方です）。こつこつ封建制度は革命で廃止されました。しかし、かつての強制関係は一掃されたはずなのに、新しい体制で働く労働者たちの生活は、封建社会の農民よりもさらに苦しいものとなりました。

です。

この取引で、資本家は別にインチキをしているわけではありません。世間並の生活費ではなく、もつと低い賃金をむりやり押しつける資本家は現実にはどこにもいませんが、資本家が、市場経済の法則にしたがって、世間なみの生活ができるだけの賃金を支払ったとしても、その分を埋め合わせるのに必要な労働は、一日の労働時間の一部分にすぎません。それ以上の労働時間は剰余労働であり、資本家は、まちがいに剰余価値を手に入れることができます。

これが、資本主義的搾取の仕組みです。

普通の商品交換では、生産者が生産物の所有者として市場に出てきますが、いま見たように、資本主義社会での労働力の売買では、資本が生産物の所有者になります。ここでは、生産物か誰のものになるか、という点で、市場経済の法則が逆転するのです。

資本主義の搾取は、封建社会での「年貢」の取り立てとは違って、その仕組みも姿もはつきり見えない、というところに大きな特徴があります。

資本家と労働者の関係にしても、権力でおさえつけられる関係ではなく、市場で「労働」という商品を買取る関係、売り手と買い手の関係です。「労働」の売り手である労働者は、買手の資本家から、「労働」に対応する賃金の支払いを受けます。こつこつ市場経済のもとの対等の関係を結んだはずなのに、そこから驚くべき貧富の格差が生まりました。生産した富は資本家の側に集中し、生産者である労働者の側は、困難な暮らしが続くのです。いったい、こんな不公平な状態はどこから生まれるのか。

経済学者（スミスやリカード）たちは、新しい経済の体制を研究して、労働が富の源泉であること、市場で取引される商品の価値は、そこにどれだけの労働がつきこまれているか、商品が体現している労働の量で決まること、商品交換では、同じ価値のものが交換されること（等価交換）、こつこつこつまでは、

なぜ、そういう逆転が起こるのか。その原因は、一方では、生産者が生産手段を失って、労働力の売り手になり、他方では、資本家が生産手段をもって、労働力の買い手になったという社会的変化のなかにありました。

（平凡新書「マルクスは生きている」p76-82）

